

平成17年度 研究の概要

香川大学教育学部附属坂出中学校

ごあいさつ

学校長 七 條 正 典

さて、平成18年度には新しい学習指導要領の改訂が行われるとの方向性が文部科学省より示されましたが、前回の学習指導要領で示された「生きる力」や「ゆとり」について、様々な論議が行われ、基本的な考え方は変わらないとされながらも、学力低下の指摘を受けたことへの対応も含めて、その改善の方向が検討されています。

私どもは、平成15年度より、3年間文部科学省研究開発学校として、附属坂出幼稚園、附属坂出小学校、附属養護学校とともに、「学校教育制度における『5・4制』の区切りに関する妥当性の検証」について、共同研究に取り組んでまいりました。

その研究の過程において、本校では特に、研究の経緯でも述べておりますように、自己育成力の活性化を研究の中心に据え、生涯学習の礎となる自ら学ぶ力の育成に取り組んでまいりました。そして、知・徳・体のバランスのとれた子どもを育てるための豊かな学びの成立に向けたカリキュラムづくりに取り組んでまいりました。

本号では、その研究の課題でもあった、教科・道徳・特別活動をどのようにリンクさせるか、また「生きること」と「学ぶこと」の統合をどう図るかを中心に、その取り組みについて紹介いたしております。何とぞ、ご忌憚のないご意見とともに、温かいご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

〔研究主題〕

豊かな学びを育むトータルカリキュラムの創造

「生きること」と「学ぶこと」の統合をめざして

1 研究主題について

学校教育の目標は生徒一人一人に全人的な力を培うことであり、「生きる力」を育てることにある。この「生きる力」は、豊かな識見や理性的な判断力、合理的な精神だけでなく、美しいものや行為、自然に感動する心といった柔らかな感性をも含み、健康や体力はそうした資質や能力を支える基盤として位置づけられているものである。昨年10月に出された中央教育審議会の答申でも、こうした義務教育の使命を再確認し、「学校力」や「教師力」を高め、子どもたちの「人間力」を豊かに育てていくことを謳っている。

本校の研究主題に掲げる「豊かな学び」とは、生徒が主体的に「生きる力」を獲得していく学びであり、教科、道徳、特別活動の各領域を有機的に関連させることにより成し得るものと考えている。また、学びの目的を「自分の夢を描き、その夢を実現する力を身に付けるため」とすれば、これはすなわち「よりよく生きるために学ぶ」ということでもある。つまり、「生きること」と「学ぶこと」を統合し、豊かな学びを育むトータルカリキュラムとは、生涯学習の基礎を培うという視点から、一人一人の生徒に自己実現を図る資質・能力を身に付けさせ、「生きる力」を育むためにも重要であるとする。

2 研究の経緯

これまでに本校では、必修教科（共通学習Ⅰ・Ⅱ）、選択教科、総合学習といった主として教科系の学びを相互に関連づけたカリキュラム構造を提案した。さらに、生徒が自分自身の学びを見つめ、今後の学びの方向性を見出すことができるように、自己育成力（対象化・相対化→今後の方向性）の活性化を研究の中心に据え、生涯学習の礎となる自ら学ぶ力の育成に取り組んできた。

そして、平成17年度よりこれまでの研究をベースとし、生徒たちに基礎的な知識・技能や思考力、創造力などを育むとともに、「豊かな心」、「健やかな体」をバランスよく培うために、道德、特別活動領域におけるカリキュラム構築に着手している。図1のイメージにあるように「豊かな学びを育むトータルカリキュラム」とは、生徒自身が教科、道德、特別活動等で学んだ力を総合学習の場において見つめ、そこでの気づきを日常生活に還元していくことのできる循環型カリキュラムである。

しかしながら、このようなカリキュラム構造を具体化する段階で、2つの問題に直面した。一つは教科、道德、特別活動をどのようにリンクさせるかという問題。もう一つは、教科カリキュラムにおいて『『生きること』と『学ぶこと』の統合』とはどうあるべきかという問題である。前者は領域を隔てた全体研究(1)-①・(1)-②、後者は主として教科研究(2)として後に述べる。

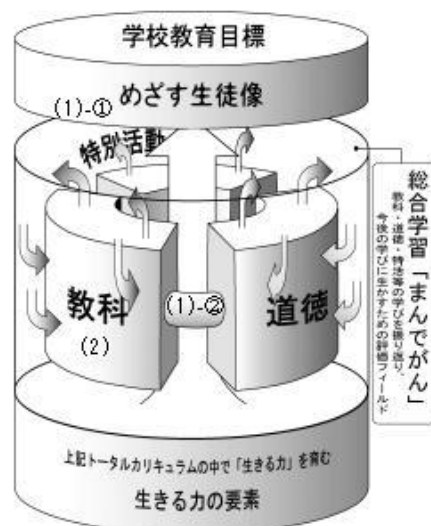


図1

本校トータルカリキュラムのイメージ

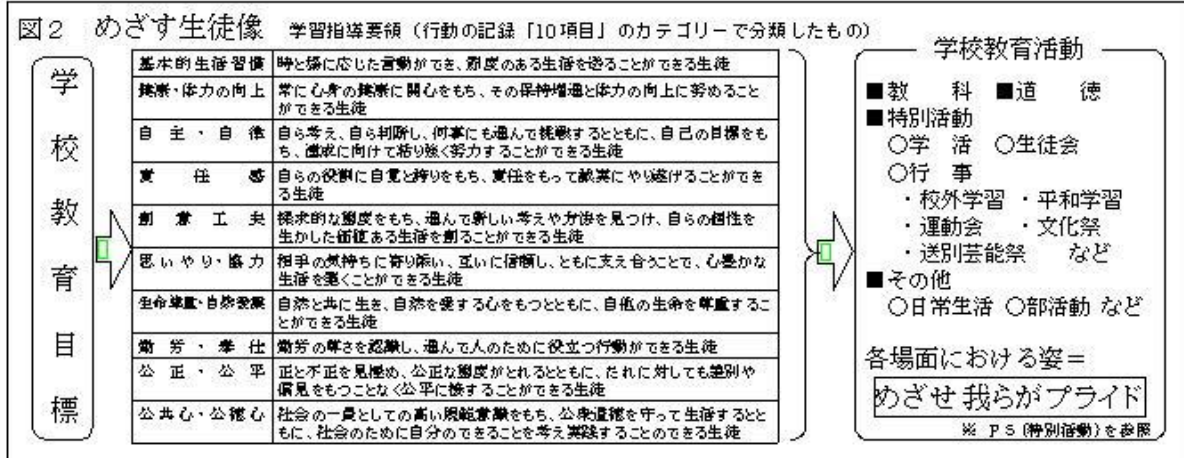
3 研究の概要

(1) 教科・道德・特別活動のリンク

① 本校教育目標から見えるめざす生徒像

まず、学校での様々な活動場面における「めざす生徒像（教師＝こんな生徒であってほしい、生徒＝こうありたい自分）」を全教師及び全校生徒から理想の姿として意見を収集した。その意見を参考に、本校教育目標との整合性を配慮しながら多面的なカテゴリー（学習指導要領「行動の記録10項目」）に合わせて、より具体的な「めざす生徒像」を設定した。このことによって、生徒一人一人が各教育活動の諸場面にて「今、何を大切にすればよいのか」、「どのような力を身に付けることが望ましいのか」といった行動の指針を得ることができるとともに、活動に対する自己評価や次なる活動への課題意識をもつことができるのである。

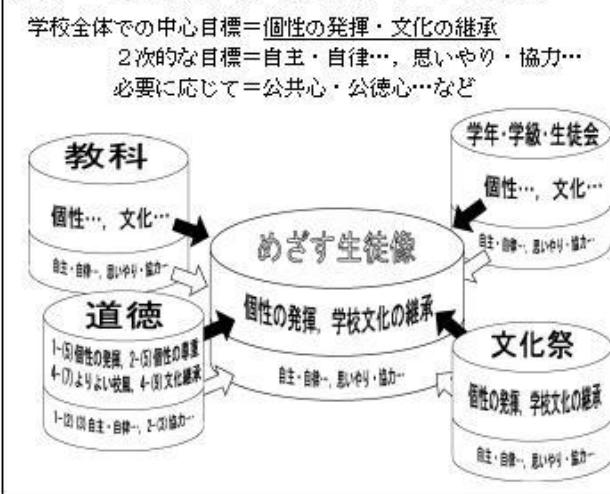
そして、ここで設定した「めざす生徒像」は、さらに、領域リンクの接点としての機能をもつこととなる。



② めざす生徒像を軸としたユニット

教科、道德、特別活動をリンクさせたトータルカリキュラム構築の基本構想としては、教育活動の中で取り扱われる時期が比較的安定し、教育的価値に共通項が見出せる行事（五大大行事「修学旅行などの校外学習、

図3 文化祭をもとにしたユニットの例



平和学習、運動会、文化祭、送別芸能祭」に着目し、その五行事とのリンクを図った道徳カリキュラムを編成した。さらにそこへ特別活動（ここでは、主として学級及び生徒会活動）としての実践的アプローチをからませ、人としての生き方、在り方についての自覚を深めさせたり、集団や社会の一員としてよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度や豊かな心を涵養したりすることを目的としている。

このようなユニット構造を、五行事を中心として設定することにより、それぞれの時期にそれぞれの領域での活動のねらいや目的を明確にすることができるとともに、互いの取り組みの相乗効果が期待できる。

(2) 学びの意味化「教科教育における『生きること』と『学ぶこと』の統合」

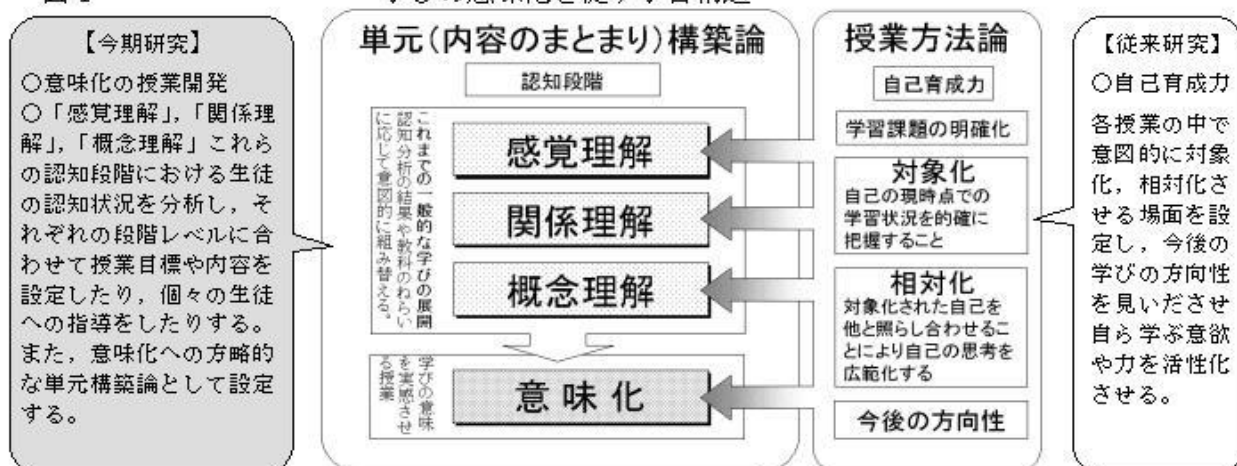
各教科における「生きること」につながる「学び」とは、学習に意味や価値を見出させること（学びの意味化）であると考え。これまで、私たち教師は、教科の内容を「わかりやすく」教えることに腐心してきた。そのこと自体は、基礎学力の定着や動機付けのためにも極めて重要であり、多くの先行研究がその成果を掲げていることから理解できる。しかし、昨今の学力低下や学習意欲の欠如の問題は、かつてのそれとは異なり、「なぜそれを教えるのか」「その知識や技能は本当に必要なのか」といった学びの根元的な追究を我々に課しているように思えてならない。一人一人の生徒が、目の前の学びに対し「なるほどそうか」「もしかすると、こういうことだったのでは」と心の底から学びの面白さやよろこびを味わい、その意味や価値に気付くことこそ、生徒も私たちも求めているのではないだろうか。このようなことから、今期は、全教科をあげて、学びの意味や価値を実感させる（「学びの意味化」を促す）学習構造の開発に着手した。

そのために、まず、各教科におけるこれまでの学びが、生徒にとってどのように認知されていたのかを分析し、その状況を「感覚理解」「関係理解」「概念理解」といった3つの認知段階に分類・整理するとともに、その結果を単元（内容のまとまり）構築に当てはめて、一般的な学びの展開における学びの系統性や妥当性を検証することとした。さらには、従来までの単元構築を必要に応じて組み直し、学びの意味化を促す方略的な単元構築論としてその在り方を追究することとした。



図4

学びの意味化を促す学習構造



道 徳

本校道徳の重点目標は、「互いに高め合い、心豊かな生き方を創造する生徒の育成」である。その達成のために、道徳の時間や他の教育活動を通じて心の教育に努めている。特に、道徳の時間の扱いを具体的に示した本校の道徳カリキュラムには3つの特徴がある。

第1は、他領域（教科・特別活動）とのリンクを図るユニットを組み込んでいる点である。このユニットの大きな枠組みと道徳的ねらいは基本的に全学年共通しているが、各学年系統性をもたせている。

（例）「送別芸能祭」（全学年共通行事）

○全体のねらい 自分がいろいろなものに支えられていることに気づかせ、それらの支えに感謝する気持ちを大切にする心情を育てる。

1 年	2 年	3 年
1年間の学びを振り返り、さまざまな感謝の思いに気づく。	2年間の学びを振り返り、さまざまな感謝の思いを見つめる。また、その学びが今の自分の支えとなっていることに気づく。	3年間の学びを振り返り、その支えの上に今の自分があることに気づく。また、「送別芸能祭」をどう迎えるかを考える。

これまでに構築してきたユニットは「修学旅行（3年）・集団宿泊学習（2年）・歩く日（1年）」、「平和学習」、「学園運動会」、「文化祭」、「送別芸能祭」の5つである。いずれも本校伝統の行事であり、それぞれ他領域とのリンクを図り研究・実践を重ねてきたものである。今回の研究では、それをトータルカリキュラムの一環として明確に位置づけ、道徳や各教科の授業でも扱うようにしている。このようなカリキュラムにより、生徒の活動や生活と結びつけた学びを実現することができ、さらにそれぞれの学びが生徒の内面で関連づけられて、個々の学びの価値づけや定着が期待できる。



【「送別芸能祭」感謝の思いを込めての授業風景（2年）】

第2は、他教科とのリンクを道徳・教科両面から図りやすくするために、道徳カリキュラムの中に、関連する他教科の題材も組み込んでいる点である。このカリキュラムによって、取り上げた道徳的内容について道徳・教科両面から適当な実施時期や道徳題材を決定しやすくなり、教育的効果も高まることが期待できる。

教科とリンクした道徳授業の実践（3年）

国語で学習した「論語」、社会科で学習した「個人と社会生活」、そして、今後社会科で学習する「地球市民をめざして」とリンクさせた道徳の授業である。資料「孔子と葉公」を媒体とした。「正直に生きることが、自らの利害損得だけでなく、相手やまわりへの思いやりの気持ちに根ざしていることに気づかせる」というねらいの道徳の授業をする中で、教科での学びが反映されたり認識が新たになったりすることも期待した。



【教科とのリンクを図る道徳授業】

第3は、各学年の道徳の重点目標を達成するための重点プログラム（各学年、1学期→2学期→3学期と段階的に実施する）を組み込んでいる点である。テーマや内容は、各学年ごとの生徒の実情や課題に即して柔軟に設定し、道徳の年間カリキュラムを補完している。

学年重点プログラムの実践（1年）

学年重点目標である「個性の伸長」の一貫として、人生の先輩を校内に招き、講演会を催した。高松市出身の双子歌手「ROCOOCO」を招き、『夢』をテーマとして、2人が歌手を目指したきっかけ、オーディションになかなか合格しなかった苦労話、そして今までの様々な人々との出会いから学んだことなどの貴重な話を聞いた。生徒は、日々の生活の中での出来事やそのつど感じてきたことと結びつけて感想を述べた。



【Rococoからの歌のプレゼント】

特 別 活 動

特別活動の目標は、望ましい集団活動を通して個性の伸長や生き方についての自覚を深め、自己を生かす力を養うことにある。本校の研究のテーマである「生きること」と「学ぶこと」の統合において、特別活動は、各教科等において培われた力、道徳において養われた心情を集団活動のなかで実践するものである。また、その実践、具体的体験の中で得られた知識や技能、心情は、再び教科等の学習や道徳の実践において、深められていく。このような基本的考えのもと、本校の特別活動、特に五大大行事において、その活動がより効果的に生徒の生きる力の伸長につながるものとなるよう活動のねらいを明確にし、各教科、総合、道徳とのリンクを図る特別活動の実践の具体的研究を進めている。

そこで、まず本校の五大大行事を中心に、「こんな生徒でありたい」という本校の生徒の思いと、「こんな生徒であってほしい」という教師の願いをあわせ、その指針となる「目指す生徒像」を『我らのプライド』としてまとめた。これは本校が目指す生徒の具体的な姿であり、目標である。特別活動の目標となる姿であり、教科や道徳においてもリンクする視点として活用できるものとなり、トータルカリキュラムを構築する上でも柱となる部分である。



【めざせ我らのプライド（部分）】

基本的生活習慣		運動・体力の向上		自主・自律		責任感	
基本的生活習慣	運動・体力の向上	自主・自律	責任感	基本的生活習慣	運動・体力の向上	自主・自律	責任感
1. 起床・出勤	1. 起床・出勤	1. 起床・出勤	1. 起床・出勤	1. 起床・出勤	1. 起床・出勤	1. 起床・出勤	1. 起床・出勤
2. 授業中の態度	2. 授業中の態度	2. 授業中の態度	2. 授業中の態度	2. 授業中の態度	2. 授業中の態度	2. 授業中の態度	2. 授業中の態度
3. 授業後の態度	3. 授業後の態度	3. 授業後の態度	3. 授業後の態度	3. 授業後の態度	3. 授業後の態度	3. 授業後の態度	3. 授業後の態度
4. 家庭での態度	4. 家庭での態度	4. 家庭での態度	4. 家庭での態度	4. 家庭での態度	4. 家庭での態度	4. 家庭での態度	4. 家庭での態度
5. 社会での態度	5. 社会での態度	5. 社会での態度	5. 社会での態度	5. 社会での態度	5. 社会での態度	5. 社会での態度	5. 社会での態度



【全校集会での周知のようす】

○ 実践事例 「送別芸能祭」

本校の最も伝統ある行事がこの「送別芸能祭」である。学級の枠を越え、それぞれの学年が1つとなって3年生を送り出す場を創りあげていく。

この行事のキーワードを「感謝」とし、これまでの学びの集大成として、他者への感謝、また学びへの感謝などを実感できる活動として位置づけ、実践を行っている。ここでの、特別活動としてのねらいを具体像として「めざせ我らのプライド」をもとに提示し、それを実現するための実践的アプローチを示すことで、道徳や教科とのリンクの視点を明確にするため、活動のねらいと手順の共有化を図ることも企図している。

○ 今後の方向性

これまで実践を重ねてきた五大大行事を中心とする活動をまとめていく中で、めざす生徒像への効果的アプローチが実現できたかを検証すると同時に、そこでの反省をふまえ、よりよい集団活動、生きる力の育成の場となるようさらにユニットとしての完成度を高めていきたいと考えている。

⑤ 送別芸能祭…感謝

- ア. 実施時期
 1. 学年単位（学年ごとの日）
 2. 学年の終りを2学期末より始める。
- イ. 目的・意義（重点）我々のプライドを
 1. 学年の終りを2学期末より始める。
 2. 学年の終りを2学期末より始める。
 3. 学年の終りを2学期末より始める。
 4. 学年の終りを2学期末より始める。
 5. 学年の終りを2学期末より始める。
- ウ. 実施方法・内容（しめこ）
 1. 学年の終りを2学期末より始める。
 2. 学年の終りを2学期末より始める。
 3. 学年の終りを2学期末より始める。
 4. 学年の終りを2学期末より始める。
 5. 学年の終りを2学期末より始める。

学年	1年生	2年生	3年生
1. 目的・意義	学年の終りを2学期末より始める。	学年の終りを2学期末より始める。	学年の終りを2学期末より始める。
2. 実施方法・内容	学年の終りを2学期末より始める。	学年の終りを2学期末より始める。	学年の終りを2学期末より始める。
3. 評価方法	学年の終りを2学期末より始める。	学年の終りを2学期末より始める。	学年の終りを2学期末より始める。
4. 実施時期	学年の終りを2学期末より始める。	学年の終りを2学期末より始める。	学年の終りを2学期末より始める。
5. 実施場所	学年の終りを2学期末より始める。	学年の終りを2学期末より始める。	学年の終りを2学期末より始める。

送別芸能祭のねらいと運営計画

総合学習「まんでがん」

本校がめざすトータルカリキュラムは、「豊かな学び」つまり「生徒が主体的に知識・経験を獲得し統合すること」ができるようにするため、各教育領域を有機的に関連づけ、学びの段階性を重視した階層構造によって構築を試みている。特に、総合学習「まんでがん」については、ここでの学びが共通学習や選択教科、その他の学習にフィードバックできること、また自己の学びの状態を自身で認識できることを大きなねらいとして実践している。つまり、教科、道徳、特別活動等によって培われた基礎的な知識・技能、もしくはものの見方、考え方、さらには心情や行動といった自己の様態が、社会生活を営む上で自己の能力としてどのように発揮されるかを、教科枠ではない生きる上での素養という切り口で評価し、自己の存在価値を認識できる評価フィールドとして位置づけている。

総合学習「まんでがん」には、Ⅰ、Ⅱの関連した2階層の構造を設定している。まず、1年生を学習対象にしている「まんでがんⅠ」では、自己追究に要求される基礎的部分の育成を目的として3つの力(調べる力、まとめる力、発表する力)を培っている。そして、2、3年生を学習対象にしている「まんでがんⅡ」は、個人ごとに学習を自己評価するフィールドとしての構築を目指している。本年度は、次のような学習コースを設定して取り組んでいった。

【まんでがんⅠ】 対象学年：中学1年生(119名)

コース	学習活動のテーマおよび内容
1	私は未来のエネルギー社会を拓く提言者！
2	めざせグリーンコンシューマー！～環境にやさしい買い物で世界が変わる
3	スポーツを科学する



【学習発表会で自己の学びを表現】

【まんでがんⅡ】 対象学年：中学2年生(120名)、中学3年生(118名)

コース	着目する知性	学習活動のテーマおよび内容
A	言語 人間関係形成 自己観察・管理	自己の内面探究
B	言語 人間関係形成	共生社会に生きる
C	空間認知 身体－運動 自己観察・管理	心を身体で伝える ～自己の感情表現～
D	空間認知 音感 人間関係形成	メディアと私
E	空間認知 身体－運動 自然との共生	自然と人間との関わり合い
F	論理－数学 自然との共生	私たちの暮らしと自然との調和

上述したように、ここでの学びは、基礎的な学習段階である必修教科や選択教科、そして日常生活の様々な場面に回帰させるスパイラル性を可能にするトータルカリキュラムとしての循環構造を成し得ると考えている。各コースの生徒が自己を評価し、学習後に記述した自己の今後の重点課題を以下に示す。

《今後の自己の方向性》

- ・ 自分の苦手なことや嫌なことにも積極的に取り組んでいくように努力したい。そして、人と接するときにありのままの自分を恥ずかしがらずに出していきたい。(Aコース)
- ・ 1つ1つの判断をできるかぎり自分で決定して自分の考えをしっかりともちたい。また、友だちと進んで会話したり、授業中も積極的に発表し続けることで、自分らしさを表現していきたい。(Bコース)
- ・ 人と接するとき、まず相手の様子を話や行動からよみ取り、自分を分かってもらうために分かりやすく表現したい。また、相手の気持ちをよみ取ることが苦手なので、しっかりと人の話を聞くようにしたい。(Cコース)
- ・ 自分が相手に伝えたいことを初めは時間がかかってうまくいかなくても、その場で冷静に考えてじっくりと対応すれば何とかなる。また、短時間で相手にうまく伝えられることを生活の中での目標に掲げたい。(Dコース)
- ・ 教科学習のレポートづくりでは、資料をできる限り多く集めて、多くの情報の中から1つずつ結論を出すという活動をしていこうと思う。また、1つの情報だけに頼りすぎないようにしたい。(Eコース)
- ・ 新たに見つけた疑問を解決していくために、どのようなことをしていけばよいのかをその場でじっくりと考えて臨みたい。また、友だちや家族の協力がとても大きいので、感謝しながら協力をもらっていきたい。(Fコース)

※「まんでがんⅡ」での生徒の記述より抜粋

《国語科》

豊かな言語認識の深化・拡充をめざす国語科授業の在り方

— 発達段階をふまえた国語科カリキュラムの開発 —

佐藤 宏一 佐藤 浩二

言語を生み出す能力は、「元来人間が生まれながらにして持っている生得的な能力である」(Chomsky, 1957)という考え方にたつと、国語科が指導する内容は、言語の産出能力ではなくその活用・運用能力ということになる。つまり、事物や心象等に付されたことばの意味を認識し、それを社会的環境の中で価値付けした後、対人的コミュニケーションの場面において深化・拡充させながら思考・意思伝達的手段として活用・運用していく能力である。言語を豊かに運用することは、豊かな思考と人間関係を育み、豊かに生きることにつながる。言語のもつ力を認識し、その使い手として深い関心と高い価値付けがなされ、自己の言語能力を積極的に高めていこうとする意識を醸成できれば、生徒の言語能力は自ずと深化・拡充すると考えられ、ここに、授業の意味と価値付けを見出すことができる。既に備わっている自己の言語能力がより広く深いものへと再生されれば、それまでの思考や理解、人間関係はより充実したものに発展する。授業はその瞬間を確実に生徒に実感させることをねらっており、これを「学びの意味化」と考えている。

国語科で身につけた言語能力は、直接他教科の理解を支える基本となる。また他教科で学んだ事象は、さらに言語意の意味認識に多面的な解釈を与える。このような他教科との連関性も十分視野に入れながら、学習の内容や時期についても考慮して、授業構造及び段階的なカリキュラム構成について追究している。



【「悲しみ」という言葉の意味認識を交流する生徒。(「僕の防空壕」より)】

《社会科》

社会的自己確立する生徒の育成をめざした社会科授業の在り方

— 「生きること」と「学ぶこと」の統合を目指した社会科カリキュラムの構築 —

安藤孝泰 北岡 隆

急速な発展、変貌を続ける現代社会において、これらの変化に主体的に対応し、一人一人が個性や創造性をのびし、社会性や協調性を身につけていくことが問われている。換言すれば、自ら意欲を持って社会の問題を発見し、学び、考え、主体的な判断のもとよりよく解決していく力（「生きる力」）が大切な時代であると言える。そのために社会科では教科の「学び」と「生きること」を統合し、生徒たちによりよい社会を築くためにはどのような力を育てなければいけないのか考えた。そこで生徒たちが身につけておくべき力を、自ら社会事象を多面的・多角的に分析し、事実認識をし、価値判断ができる力（社会的自己確立する力）とした。そのための具体的な教材の開発やその際に最も有効な視点と方法の研究を中心に「生きること」と「学ぶこと」を統合するトータルカリキュラムの柱となる社会科カリキュラムの再構築を目標として研究を進めていくこととした。そこで次の方法で研究を進めている。

1 討論学習を組み込んだ社会科カリキュラムの見直し

- ① 将来の社会の形成者として必要な基礎的知識を培い、社会認識を形成することを主眼とした授業の見直し
- ② 生徒の授業における様態を分析し、思考の流れと授業（基礎・発展）のあり方の見直し

2 社会科の討論学習教材開発を行う

- ① 社会科独自の討論学習の課題（問題）の開発（一般の問題と社会科独自の問題の違いを明確にする）
- ② 討論学習の学習過程を開発する（生徒の思考の流れに沿って）

3 社会認識を通して公民的資質を形成する社会科学習の授業実践を行う

《数学科》

数学的な見方や考え方のよさを知り、

よりよく生きるための数学教育の在り方

— 数学を学ぶことのよさが実感できる数学科カリキュラムの構築 —

木谷直充 半山章人

PISA2003の調査の中に「数学における道具的動機付け」に関する項目がある。その中の「将来の仕事の可能性を広げてくれるから、数学は学びがいがある。」という質問に対して、肯定的に答えた生徒の割合は、日本は42.9%、平均は77.9%である。この結果は、平均を大きく下回り、調査した41か国の中で最低である。日本では、数学をあまり必要だと思っていない生徒が多いことを示している。

授業をしていても、生徒から「なぜ数学を勉強するの?」「普通の社会生活を営むのであれば算数で十分。」という声を聞く。このような疑問をもったまま学習を続けても、学ぶ意欲が乏しく、効果的な学習にはなりにくい。また「数学の必要性」「数学を学ぶ意味」を単に言葉で説明しても、なかなか実感として伝わらない。そこで、これらを実感できる授業を組み込んだカリキュラムを開発する必要があると考えた。

数学科では、この「学びの意味化」に焦点を絞り、次の方法で研究を進めている。関数領域を例にすると

- 1 生徒の認知状況（関数に関してどのような理解状況にあるか）を調査
- 2 単なる関数の利用ではなく、自然に関数学習の意味が感じとれる「意味化の授業」の開発
- 3 関数の有用性や関数的な見方・考え方のよさを実感できる授業を位置づけた「単元カリキュラム」の開発

「関数の授業には、こんな意味があったんだ。」とか「関数は、今後こんな場面で使えそうだ。」と学習の意味を実感できる生徒を育成することで、「生きること」と「学ぶこと」の統合が図れると考えている。



【2乗に比例する関数の意味化の授業】

《理 科》

科学リテラシーを身につけ、「生きること」につながる理科教育

— 科学的な見方・考え方の価値を見出す理科カリキュラムの構築 —

真鍋正史 石川恭広

理科教育のねらいとして、科学的な見方・考え方を醸成することを挙げることができる。科学的な見方・考え方とは、物事を直感的に、あるいはただ漠然と捉えるのではなく、「その事実には必ず原因があり、今の結果を生じている」というような、原因や過程を認識し、その上で結果を生じているという見方・考え方ができることだと考える。このような見方・考え方の価値を見い出させることが、理科を学ぶことと生きることとの統合だと考える。そして、そのような理科の学びを深めるために、各単元ごとに、内容の理解とともに、科学リテラシー（生活の中で科学できる素養）を培う手だてが必要とってくる。今回の研究では、各単元ごとに、以下に示すような科学リテラシーに関する認知の状況を精選し、それらの構造化を図っている。



【仮説を検証実験により
確認しているようす】

	認 知 の 状 況
感覚理解	・ 日常生活の中には、不思議なことや分からないことがいろいろあることを認識する。
関係理解	・ どういう仮説を反証して、目的の仮説の妥当性を高めたいかを明らかにできる。 ・ 課題の解決に向けてどんな実験をするべきか、どんな実験が可能かを理解している。 ・ 仮説を検証できる十分な根拠が存在しているかどうかを判断できる。
概念理解	・ これまでの自然認識は、普遍のものとは限らないことを理解する。 ・ 自然の巧みさ、精妙さ、雄大さ、神秘性などに気づく。
意 味 化	・ 日常生活の中で、科学的に物事を見ることのすばらしさや楽しさを実感し、学びの価値を見出している。

《音楽科》

音楽が表現する美しさとかかわることができる音楽学習をめざして

— 音楽科カリキュラムづくりに関する一提案 —

十川裕史

現代はありとあらゆる情報が氾濫し、音も音楽も溢れんばかりである。そのため、一つ一つの音や音楽が目の前をただ通過し、しっかり聴いたり深く味わったりする機会が少なくなっている。そのような中でこそ、音楽の美しさにかかわらせ、美しいものを美しいと感じる心を育てることによって、現代を豊かに生きる力を培うことができると考えている。これまでの研究で、音楽の「かたち」から「こころ」を味わうことができる授業づくりを模索し、生徒に「かたち」の知覚を促すことの重要性を確認した。そこで、「かたち」の知覚をより促すことができるよう、生徒と音楽の「かたち」の接点に注目してみた。音楽は時空間に鳴り響く音の動きという現象であり、その現象には様々な要素が含まれている。例えば歌唱教材では、音楽の「かたち」と歌詞の「かたち」が同時に鳴り響いている。また、鳴り響く音楽の中にも、音楽そのものが表現している表現性（メロディー、拍子、リズム、ハーモニー、速度、形式、様式）と、それを演奏している表現者の表現性（音色、アゴーギグ、強弱、装飾）の二つが同時に存在している。本研究は、次の二つのことを重点にして進め、音楽の美しさにかかわることができる音楽学習に迫った。

- 1 現在の「表現」と「鑑賞」の領域を、「歌唱領域」（歌詞を表現する音楽）「器楽領域」（音そのもので表現する音楽）、「民族音楽領域」（日本音楽を中心とする民族音楽）に捉え直してカリキュラムづくりを行う。
- 1 学びの認知段階の分析に、音楽そのものがもっている「音楽の表現性」と、表現者によって表現された「表現者の表現性」のそれぞれの側面から分けて捉え授業を構成をし、それを「意味化」の授業で締めくくる単元開発を行う。



【音楽の「かたち」を知覚する授業】

《美術科》

見る力・感じる力を高め、学びの意味を実感させる美術科教育

— 鑑賞の発達段階に基づいたカリキュラム構築 —

河内直人

造形美術に関する発達段階についてはリード(1943)やローウェンフェルド(1947)など数多くの先行研究があるが、それらの多くは子どもに絵を描かせることから認知や概念の発達を見、創造性やパーソナリティに応じた指導を推しはかろうとするものである。しかし、実際の造形活動は描くことから始まるのではなく、造形作品や対象との出会い「見る・感じる」ことから始まる。したがって、「描く」ことによる分析とは別に、「見る・感じる」ことに関する発達段階を分析する必要性があると考えた。

本研究では、個々の生徒が造形作品や対象をどのように認知しているか、また、その状況はどのような段階で、全体としてどのような傾向にあるのか等をアンケートやワークシートの反応から分析するとともに、その結果を基に「鑑賞の発達段階」を設定し、「見る力・感じる力」を高める授業展開やカリキュラム構築に生かそうとしている。また、美術科における「学びの意味化」とは、そこでの学びが、自らの生活を明るく豊かにしていく造形的な基礎として、また、造形活動や作品を通じた他者理解・異文化理解として、そして、自己を含めた人間の生き方・在り方を見つめ、よりよく生きる力として働いていることを実感させることであると考え、その授業開発に取り組んでいる。



【なぜ見方や感じ方が違うのだろう】

本校美術科で捉える「見る力・感じる力」

- 見る力…視覚情報を獲得する能力。対象は、造形物、自然、社会。（目に映るもの）
- 感じる力…豊かに想像し、解釈する能力。対象は、人。（心に映るもの）

《保健体育科》

運動を通して、身体・仲間とのかかわりを創造する保健体育学習

—「豊かな心と体づくり」を目指した保健体育科カリキュラムの構築—

池下一頭 千木良佳亜

保健体育科では、「生きる力」の中での教科の役割を「豊かな心と体づくり」とし、「生きること」とは「豊かな心と体を育てていくこと」、「学ぶこと」とは「適切な運動実践を通して、健康・身体能力の保持増進、及び共に運動を行う仲間との人間関係づくりの習慣化を図ること」と捉えている。

全国的に体力の低下が大きな問題とされている。保健体育科としては、体力を、筋力などの基礎体力だけでなく日常やスポーツ活動に生きて働く「身体能力」として捉え、その「身体能力の向上」のため、授業外、学校外の活動、そして生涯体育・スポーツにつながっていくような、運動に親しむ資質・能力を育てることが大切であると考えた。そのためには、子どもたちが「運動や健康を学ぶ大切さを心から感じる」ことが必要であり、それが保健体育科における「学びの意味化」であると捉えている。子どもの心身の認知段階の分析を取り入れながら、学びの意味化を促す単元の構築に取り組みたい。

そこで、研究の方向性として「健康・身体能力の向上」「ライフスキル教育」に着目しようと考えた。スポーツを規範意識や人間関係形成を始めとする、人間として必要なことをバランスよく学べる場としての価値を改めて見直すと共に、健康・身体能力の向上への取り組みとライフスキルを育てるための取り組みを取り入れた適切なスポーツ実践を通して、子どもたちが「豊かな心と体づくり」の大切さを再確認し、更には「生きる力」を学び伸ばしていけるものと期待する。



【身体能力の向上を図ったトレーニングの様子】

《技術・家庭科》

よりよい生活をめざした技術・家庭科学習の在り方

—生活の見方や考え方を習得し生活化できる技術・家庭科カリキュラムの構築—

氏家徹也 齋藤恵子

本教科における「よりよい生活をめざす」とは、単に生活の自立を図ることだけではなく、よりよく生きていこうとすることである。そして、このテーマをより具体的に以下の3点に絞って考えることとした。

- Ⅰ 自分の生活の中での気づきを探究する（生活の現状を見つめ、知識や技術を基に判断し行動すること）
- Ⅱ ものや資源を大切に使う（今あるものや資源を工夫し有効に使用していくこと）
- Ⅲ 新しいものを創っていかうとする（先人が創ったものやシステム及び考え方を発見し、それを継承し発展させたり新たなものを生み出していかうとしたりすること）

このような教科の目標をめざして、今年度は、生徒の認知の状況を分析したうえで、「学ぶこと」が「よりよく生きること」であると実感できる単元構築を考えている。

生徒の認知の状況は、その単元において、これまでの生活経験から思い出したり判断したりしている状況、問題解決のために新しい情報を収集し基礎・基本の知識や技能が定着している状況、生活を多面的に捉え、相互に関係づけたり問題を分析したりできる状況が繰り返されると考えた。このような認知状況を加味した学習の流れを、意図的に作ることによって、生徒は、その単元での学びの意味を実感し、自分の生活から課題を見つけ、よりよい生活を求めたり創造したりする（生活化する）ことができると考えている。このように本教科の「学びの意味」を実感できる授業づくり及びカリキュラム構成を研究しているところである。



【和食を分析している段階の授業】

《外国語科》

「つなげる」「広げる」コミュニケーションを求めて

— コミュニケーションスキルを高めるカリキュラムの構築 —

小川 正晃 西村 小夜子

本校外国語科の研究のねらいは、“Listening・Speaking・Reading・Writing”という基本的な4つの力を生かし、相手と「内容ある、よりよいコミュニケーション」を図るために、「積極的に英語を使って意思疎通を図ろうとする意欲を芽生えさせる」こととした。今回は特に、「話すこと」によるコミュニケーションに重点を置いた。「内容ある、よりよいコミュニケーション」を求めるには、相手の気持ちを優先して考えるべきではないかと考える。そのためには自分から積極的に関わっていき、相手からもいろいろと語ってもらう。「相手を楽しませる」という視点をもってコミュニケーションを図ろうとすれば、「内容ある、よりよいコミュニケーション」につながるのではないだろうか。このようなコミュニケーションを実際に成就させるために、その過程のコミュニケーションスキルに目をつけた。例を挙げると、

○相手とどのような話題で語り合おうかと考えるトピックの選定。

○困難な局面を乗り越えていこうとするストラテジー(方略)の力。

○どのように話を展開していこうかと考えるディスコース(発話)の力。
これらに目をつけて、中学校段階で理想とされるコミュニケーションを目指して、そのレベル分析を実際の生徒のコミュニケーション活動から行い、どのようにコミュニケーションスキルを高めていけばよいかを提案する。また、コミュニケーションを通して「英語」を学ぶ意味や価値を生徒一人一人が感じられるような授業構築を図りたい。



【Guest Teacher を招いての会話】

《学校保健》

生涯にわたる健康で健全なライフスタイルの確立をめざして

— 思春期における自分らしさの形成をめざした性に関する指導 —

前田 裕美

学校保健において、近年、より一層の健康教育の充実が期待されている。それは、健康教育で学び得た知識や実践力が、「生涯にわたって健康で健全に生きる」ことへつながるからである。

そこで、本校では、現代的健康課題の一つでもある性に関することについて取り上げてきた。特に、中学生時代は思春期という多感な時期を迎えるため、性に関する指導の必要性は大きいと考える。また、生徒の中には、性に関することで悩んだり、関心を持ったりする者も少なくない。そこで、性に関する指導は、「性」＝「生」つまり、これからの「生き方」について学ぶという考えを根底に置き、思春期の生徒の実態に即した指導を展開・提供していくことで、生徒の健康で健全なライフスタイルの確立の支援ができると考える。また、保健室での相談活動においても、生徒自身が自分らしさを受容し形成していけるような支援や環境作りを行うことで、自尊感情を高め心身ともに健康で健全に過ごしていくことができると考える。性に関する指導にあたり養護教諭の専門性を以下の5点と考えている。①日常の職務の中で生徒の実態を把握し、実態から出発できる。②心と体の両面から性を捉え、アプローチしていくことができる。③プラスとマイナスの両面から性のイメージを捉え、内容を焦点化できる。④学年の系統性や他教科、行事などとの関連性を考慮できる。⑤配慮の必要な生徒を核とし、全体指導と個別指導のバランスを考慮できる。

このように、養護教諭の専門性や特性を生かしながら、心身ともに健康で自他を大切にする生徒を育てたいと思い研究を進めている。



【3年団 将来の性を考える授業】

文部科学省研究開発学校指定研究(3年次) 附属坂出学園(幼・小・中・養) 共同研究について

園児・児童・生徒の生活や学びの状況に適應した教育課程を創造するため、「5・4制」を実施した場合の幼稚園と小学校及び小学校と中学校の接続の在り方並びに、幼・小・中一貫した教育課程、指導方法及び評価方法について検証する。

小学校6年生の2学級を前期(数週間)・後期(数週間)、1学級ずつ交互に中学校の教育環境で学習(50分間授業、教科担任制授業など)・生活体験(学級・生徒会活動、当番活動、部活動など)させ、その適應状況を比較検証した。生活及び学習に関する検証結果の概略については次の通りである。

1 生活全般について

実施期間中に目立った問題は見られなかった。しかし、環境やシステムがまったく異なる中学校での生活は、児童に多少なりとも心理的負担をかけることとなった。特に、教室移動の多さや50分授業等の時間に関わる制約は、予想通りの数値として表れた。また、より自主性が求められる中学校の委員会活動や係活動、清掃・日直等の当番活動においても、多くの児童が責任をもって取り組もうと努めているものの、精神的には多忙感を抱いていることもデータから読み取れた。ただし、それらは中学校生活に対し、短期間での順応が求められた結果であって、5・4制を導入するにわたっての直接的な問題点ではない。むしろ、第1・2年次とも実施期間中の後半には、それぞれの児童が、自ら行動する姿が増え、精神的成長が認められた。さらに、中1の生徒が小6の児童に詳細なアドバイスをする場面が頻繁にうかがえるなど、中1の自覚を促し、総合学習や部活動などへの主体的な取り組みにつながっていたと感じる。



【なかやかにあそぶ児童と生徒】

2 学習全般について

各教科を通じて基礎・基本の定着や思考力・判断力の育成を妨げるような結果は見出されていない。むしろ、各教科から報告されているのは、論理的思考力の発達が著しい小学校高学年に、中学校レベルの学習内容や学習方法を教科担任制のもとで適用することで多面的な見方や考え方を促し、さらなる思考力の高まりが期待できることである。そのことは、学校教育全体における今日的な課題である、学習意欲の問題や一人一人の学習特性に応じた学びを提供するといった視点からも有効であると考えられる。こうした結果から、小6に中学校の内容や方法の一部を取り入れることの効果が証明できたと言えよう。また、小学校高学年における教科担任制の導入や選択教科の実施、英語を中心とした外国語の系統的な学習の必要性など、児童のアンケートや記述、見取り等から確認することができた。